

## サイエンスアゴラ2011 レポート ——「社会をカンショウする科学と芸術」にカンショウする

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター 研究員  
北野諒

---



サイエンスアゴラとは、独立行政法人科学技術振興財団（JST）の主催する、「サイエンスについてのおもしろいこと、気になること、さらにこれからのことを、一緒に楽しみ、語り合い、共有するマルチイベント」\* であり、今年で6回目の開催となる。（\*サイエンスアゴラ公式HP <http://bit.ly/t0m3ho> より引用）

本年度は、2011 / 11 / 19・20の二日間にわたり、東京お台場地域にて開催され、個人・企業・研究機関による総数200近くのプログラムが行われた。本センターからは、北野が20（日）午前に行われたプログラム「社会をカンショウする科学と芸術」に参加した。本レポートでは、プログラムの概要を報告し、そこで得られた成果 / 課題について整理する。

### プログラム概要

日時：2011年11月20日（日）10:30-12:00

場所：産業技術総合研究所臨海副都心センター別館11階多目的室

主催：「つくる、つながる、つかう」プロジェクト（三つ部）

協力：京都大学iCeMS科学コミュニケーショングループ

話題提供者：

齋藤めぐみ（国立科学博物館地学研究部環境変動史研究グループ）

川上雅弘（大阪教育大学科学教育センター）

西本昌司（名古屋市科学館）

北野諒（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター）

## プレゼンテーション

鑑賞、干渉、緩衝、感傷……

様々な読み取りの可能性を含んだ「カンショウ」の語をキーワードに、「社会をカンショウする科学と芸術」は始まった。

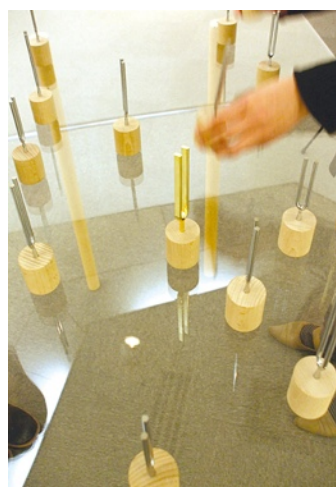
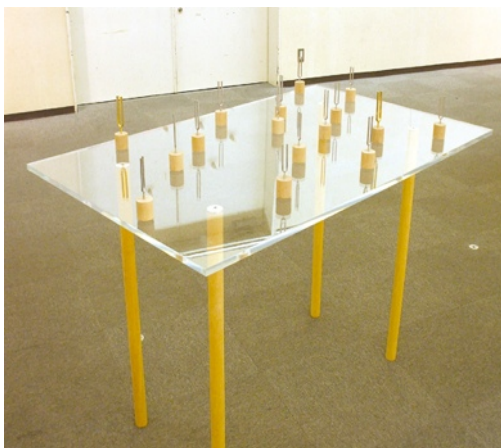
はじめに、主催である三つ部の吉澤氏から、今回のプログラムの目的と問題意識についての簡潔なアナウンスが行われた。科学と芸術の異なる視点から双方向コミュニケーションについて考えること。科学と芸術が互いに単なるツールとして消費し合うのではなく、それぞれの社会との繋がり方を根本的に変えるメディアとして考えること。以上のテーマが提示され、各話題提供者へとバトンが渡された。

まず齊藤氏からは、国立科学博物館での展示例をもとにプレゼンテーションが行われ、極力キャプション（文字情報）を省いた展示による、来館者の自発的な学習を促す方法が示された。また「科学が社会に対してどのような役割を果たすことができるのか」という問題について、3/11の後、津波に関連する研究が急増したことなどを取りあげ、実際的な社会のニーズに対して科学がどのようにバランスをとるか、ということは非常に難しい課題であるとした。

次に川上氏からは、CiRA（京都大学 iPS細胞研究所）における、一般に開放されている常設展示スペースの紹介が行われた。そこは、来館者とのコミュニケーション・スペースである一方で、研究者間のコミュニケーションのきっかけとしても機能しており、まさに人々の間を「緩衝」する場であるとした。また、そこで行われるイラスト展や写真展においては、素朴な驚きや楽しみが生まれていることを示し、科学において忘れられがちな「観笑」の重要性を指摘した。

続いて西本氏からは、名古屋市科学館における展示やワークショップの例を示しながらのプレゼンテーションが行われた。特に「科学演劇」や鉱物で作品を作るワークショップなどでは、一見エンターテインメントに思えるコンテンツの中に科学への興味を誘うテーマを含ませているとし、鑑賞（アート）から観察（サイエンス）への導き方の一例を提案した。

最後に北野からは、ACOP（アート作品の対話型鑑賞）の紹介と、その他分野への応用（古地図、レントゲン写真、顕微鏡映像）の実践例を示し、アートとサイエンスを通底する領域横断的な学びの方法についてプレゼンテーションを行った。また、自身がアーティストとして作品発表する際に、どのように鑑賞者とのコミュニケーションを捉えているかについて解説した。鑑賞者が作品に触れるなどの積極的な参加が求められる場合でも、キャプションは出さずに鑑賞者自身による気づきを重視しているということを、自作（下記作品画像参照）の例を紹介しながら示した。



**TF、800×800×1200mm、音叉・アクリル・木、2009、北野諒**

音叉を用いた作品例。鑑賞者は作品に触れ、自ら音叉を打ち鳴らすことで音響を体験する。

## ディスカッション

これらのプレゼンテーションを踏まえ、プログラムは会場の参加者も含めたディスカッションへと移行した。各人から、非常に多岐に渡る話題が提出されたため、議論の総体を概観することは困難である。以下の記述は精確な議論の記録というよりはむしろ、議論から北野が抽出した幾つかのキーポイントであり、そこからの考察である。

まずは、それぞれのプレゼンテーションの総括としてコメントされた「何故アートとサイエンスは未分化であり得たか？」という問いが鍵として挙げられるだろう。アート&サイエンスという古くて新しいテーマについては、ともすれば実際的なワークショップの設計や、現場での折衝のみに話題が終始する危険が常につきまとう。このテーマはある意味、ダヴィンチまでに遡る遠大なパースペクティブの基で考えられなければならないことを再確認させられた。

その問いを踏まえ、例えば川上氏が提示した「観笑」という要素（感動・情動という意味では「感傷」の字を当ててもよいかもしれない）が両者を繋ぐひとつの可能性であるという議論がなされた。また一方で、両分野では対象や目的は違えど、「方法」（例えばモノをよくみるプロセスなど）においては共通する部分があるのではないか、という意見も聞かれた。「科学は答え /見方を一つに決めるものではないし、アートは感性を共有するだけのものではない」とは、本プログラムの前回のセッションにて提出されたキーワードであるが、今回のディスカッションは、アートとサイエンスが渾然となった未分化の部分を探し当てる試みであったと言えるかもしれない。

議論は白熱し、会場からの意見も投げ込まれたが、いよいよ盛り上がってきた段階であえなく時間切れとなった。幅広い論点が提出され視野が広がった一方、議論を積み重ね、具体的なアイデアを提出するには至らなかった。しかもとより、今回のテーマに短時間で出せる処方箋的な結論など望むべくもない。本プログラムを端緒として、論じきれなかった点、提出できなかったアイデアをそれぞれ抱えながら、継続的なコラボレーションが出来れば幸いである。